

報告要旨 多国籍企業とグローバル生産システム
九州大学経済学研究院 石田修

多国籍企業の生産活動は、Dunning(1979)により「国際生産 (international production)」として「多国籍企業のFDIにより融資された生産」という定義を与えている。これは、1960年代から顕著となった米国の多国籍企業による完全所有による経済活動が念頭に置かれているものであった。しかし、現在では、グローバル生産ネットワークやグローバル・バリューチェーンといわれるように、FDI (所有) に依拠しない企業関係によるグローバル生産が行われている。報告では、このような、「国際生産」から「グローバル生産」への変化を分析対象とするなかで、グローバル生産におけるフォーカル企業における所有 (FDI) の役割の低下、そして、ガバナンスを体現したビジネスモデル構築の重要性を主張するなかで、フォーカル多国籍企業およびネットワーク関係を形成する多国籍企業活動を展望したい。報告は以下のように展開される。

まず、多国籍企業・組織の理論的前提を3つの視点からまとめる。すなわち、孤立した企業組織を市場制度の中で考察する思考方法では、現代の多国籍企業活動分析には不十分であることを確認する。そして、企業を関係性のなかで考察すること、さらに、制度・政策の変化と関連づけて考察する必要性を強調する。これは、孤立した利己的活動の企業組織を前提とした取引費用論 (内部化論) の分析視点の限界を提示し、利他的活動を前提とした企業間関係 (あるいはゲーム理論) や社会的埋め込み (ネットワーク論) による GVC の形成、さらに、社会関係・埋め込みを規定する政策・制度の変化 (ケインズ政策・福祉国家から新自由主義政策・小さな政府) という視点から「国際生産」から「グローバル生産」への変容を分析する視点を提示することである。

次に、「国際生産」の時代から「グローバル生産」の時代への変化の要因として制度・政策に関する2つの要因を強調したい。第1に、まず、途上国へのシンジケートローンの拡大と累積債務問題という国際マクロ経済環境変化から、FDI資源としての資金とその他の資源の分離が起こり、さらにはFDI活動へ新規参入した日本や西ドイツのFDI資源活用の多様化などにより、Oman (1984, 1989) 小島 (1985) が主張した「FDIの新形態」(所有に基づかない支配) が出現したことを確認する。このようなマクロ経済環境の変化の背後には、金融自由化という政策・制度変化があり、さらに、多国籍企業と途上国とのパワーバランスの変化、先進国多国籍企業の途上国リスクの評価などの変化がある。そして、第2は、アメリカの政策変化・金融化のなかで、企業経営者の行動と組織構造の変化がコングロマリットと垂直統合を解体させビジネスモデルによる企業間関係のガバナンスが出現したことを取り上げる。とちわけ、株主価値最大化という制度変化の圧力の中で、企業はPenrose(1959)のいう「資源の束」からJensen & Meckling (1976)のいう「契約の束」へと変化し、固定資産・流動資産を低減し、キャッシュの効率的活用のなかで、企業資源を選別し外部資源の活用を高めていく事が強調される。そして、この2つの変化は、「グローバル」生産を出現させる大きな要因であると共に、グローバル生産を支える政策・制度基盤を包摂した概念がグローバル生産「システム」であると主張される。

続いて、グローバル生産時代におけるフォーカル多国籍企業におけるFDI活動の役割低下、企業関係形成とビジネス・モデル・イノベーションの重要性を確認し、「方法的個人主義」ではなく、関係的視点から (すでに論じた制度・政策基盤とともに) グローバル生産システムの概念を明確にする。ここでは、グローバル生産システムを形成する多国籍企業を取引費用や効率単位としてのみ捉えるのではなく、Penrose (1959)の企業組織における余剰資源の存在意義とその活用、Cyert & March (1963[1992])の主張する適応的的制度としての企業組織、Thompson (1967)の依存関係とパワー行使、Richardson (1972)

のケイパビリティとその補完性、などの視点を反映した組織的視点の必要性を確認する。また、社会経済学の Granovetter(1985)の社会関係論、Uzzi(1996,1997)が主張する、ネットワークが市場外にある資源と機会を流通させる機能を果たしているという主張、DiMaggio and Powell (1983)が提起した「総体として制度的営みが認識される一つの領域を構成するような諸組織」といわれる組織フィールドの視点、Forsgren, Holm and Johanson(2005)による社会的埋め込みに基づいた多国籍企業論、Basu (2011)による集団における利他主義を提示し方法的個人主義を批判したゲーム論的アプローチなど、関係的視点(ダイアッドとネットワーク)の重要性を確認する。そのなかで、余剰資源の存在とその活用、活用の方向性に関する企業家の知覚、組織間の資源補完性とパワーバランス、フォーカル企業のビジネスモデルの意義、ネットワークを基盤にしたグローバル・バリューチェーンの生成・発展・消滅、そして、最終的に制度基盤を包摂したグローバル生産システムの問題を提示する。

最後に、グローバル生産システムにおけるフォーカル企業の企業活動の展望をおこない、本報告のまとめとする。